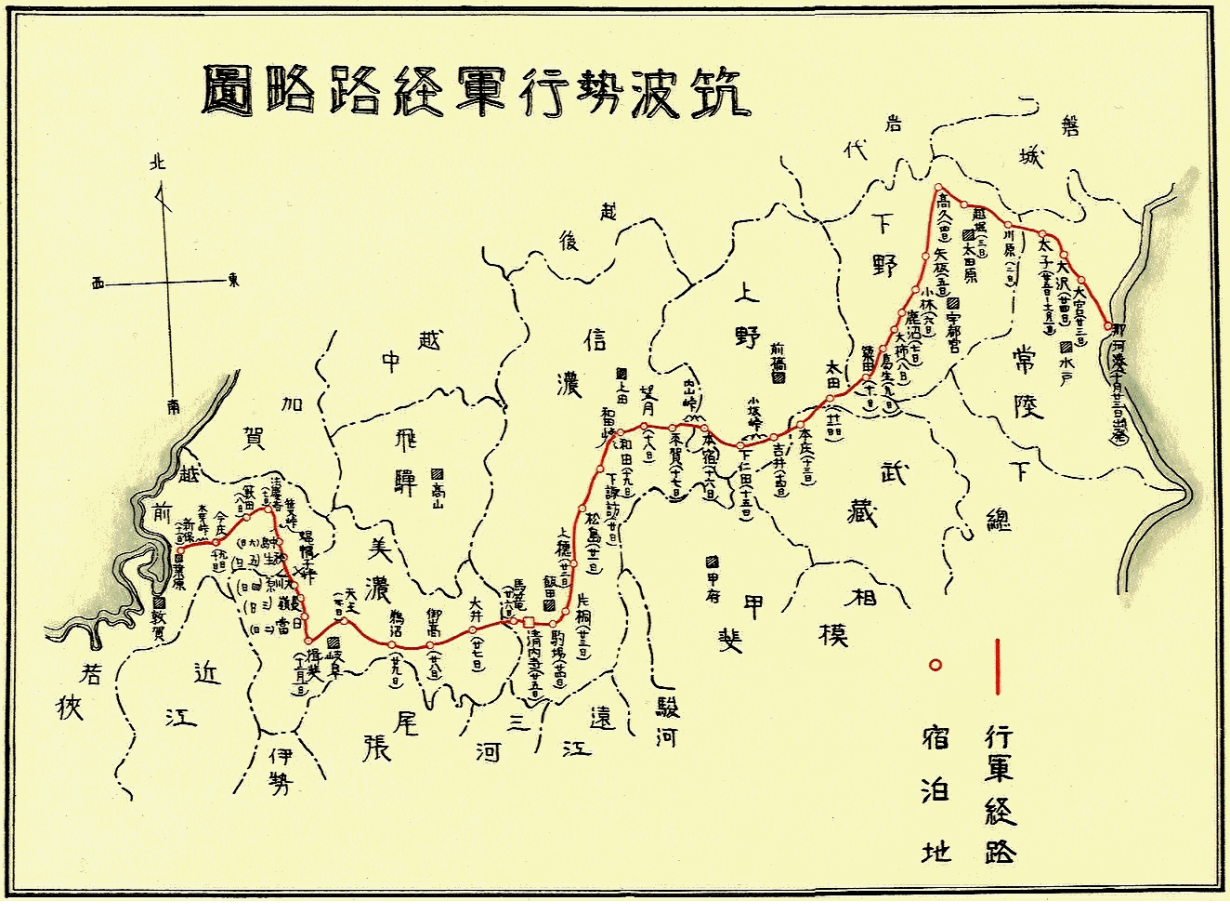
資料３：天狗党事件



元治元年(1864)3 月 27 日、水戸藩の尊攘檄派（天狗党）による筑波山挙兵とそれを契機に起こった争乱のこと。水戸藩の内部は派閥抗争が激しく、幕府に恭順する保守派に対して、藩政改革を迫り幕府も尊皇攘夷を行うべきだとする尊攘派が対立し、その尊攘派の中にも緩やかな改革を唱える鎮派と、急進的改革を唱える激派があって対立していた。水戸藩の尊攘派のなかでも、藤田小四郎（東湖の息子）・田丸稲之衛門らが率いる激派は天狗党とよばれた。彼らは文久３年（1863）ごろから攘夷の実行をとなえ、水戸藩の各地につくられていた農民の教育機関の郷校を拠点に活動し、元治元年（1864）３月筑波山に挙兵し、さらに藩政主導権を奪取すべく水戸に向かった。これを藩政を握る保守派の要請で幕府は周辺諸藩を動員して鎮圧しようとし、続いて江戸の水戸藩邸を握った鎮派は独自に軍隊を編成して自力で鎮圧しようとしてこれも水戸に向かった。

天狗党と鎮派の軍はそれぞれ幕府軍に進路を阻まれ、かえって協力して水戸を落とそうとしたが水戸藩勢に阻まれ退いたところを幕府軍に包囲され、大部分は降伏した。しかし残存部隊の 1000 人余は、尊皇攘夷の目的を達成し、幕府軍とやむなく対戦した事情を朝廷に訴えるため、京都へむけ西上を開始した。元治元年 10 月末のことである。彼らの頼みの綱は、水戸藩出身で禁裏守衛総督を務めていた徳川慶喜であった。彼らは幕府軍の追撃を振り切りながら、中仙道を西上し、途中美濃で行く手を阻まれたために北上して越前を迂回し、若狭を通って都を目指そうとした。しかし越前新保に至った時（12 月 11 日）、徳川慶喜率いる幕府軍総攻撃があることを知り、包囲の一翼を占めていた金沢藩に投降（12 月 20 日）。総帥の武田耕雲斎ら 823 人が囚われて、慶応元年（1865）1 月、敦賀（つるが）の鯡倉に監禁され、2 月、耕雲斎・藤田小四郎ら 352 人が斬罪、他は遠島や追放の刑に処せられた。